

第13回太平洋学術会議に出席して

細 川 隆 英*

米国ハワイのホノルルに本部がある太平洋学術協会が4～5年毎に開く国際的な学術会議で、今回はカナダのバンクーバーで1975年8月18日～30日に開かれ、第13回目に当り、会場はブリティッシュコロンビア大学であった。太平洋を取囲む国々、自治領、植民地などが参加単位となっている点が普通の国際的な学会と異なるが、この学術協会と学術会議の目的と主旨は、太平洋周辺の民族の福祉とこの地域の文化と学術の向上を促進し、併せて民族間の親交を計ることである。

第1回の会議がホノルルで開かれ、東京では第3回(1926)と第11回(1966)が開かれており、4～5年毎に毎回開催地が変わり、次回はソ連のレーニングラードで開かれることになっている。レーニングラードは太平洋からあまりに遠隔の地とはいえ、ソ連の国が一部とはいえ太平洋に面していることは確かである。太平洋からはなれた国々の人でもこの会議の目的、主旨に関心をもつ学者は特に参加している。

4～5年毎に開かれる本会議の他に、本会議と本会議との間に中間会議が開かれているが、その第1回はマレーシアのクワラ・ルンプル(1969)で開かれた。前回の第2回はガム島(1973)で開催され、次回はインドネシア(1977)の予定になっている。

中間会議は主にこの学術協会と学術会議の事務上の連絡であるが、併せて、その機会に特別にシンポジウムも行なっている。その規模と内容は主催国にまかせてある。

私は本会議、中間会議あわせて数回出席したことがある。今回のバンクーバーでは約1,500人、30ヶ国以上の国々から参加があった。この会議の主目的や主旨からして会議の専門分野は社会科学

学、自然科学をはじめ太平洋周辺民族の利害、福祉関係のある応用自然科学の分野にまで幅広い範囲にまたがっている。学会で取りあげられる大会での論議の主要テーマは開催国で決定し、予め参加各国の学術会議や学士院とか科学院に連絡して、それらの各種テーマに応じて参加者がスピーカーとして名指され要請されたり、応募したりして意見や論文の発表を行なう。

今回のバンクーバー大会での主要テーマは「太平洋領域における人類の未来」で、これについて下記の7つの分野からアプローチする企画であった。1. 人口問題、2. 水産資源、3. エネルギー資源、4. 陸産資源、5. 栄養問題、6. 科学と社会科学に対する研究方策、7. 太平洋領域における人類未来の諸問題。

上記のように人類の生存に直接つながる社会問題のほかに、動・植物生態学、生物地理学、自然保護と環境保全、地理学、海洋科学、地質学、古生物学、島嶼生態系の課題など学術的研究課題についての各種のシンポジウムも企画された。

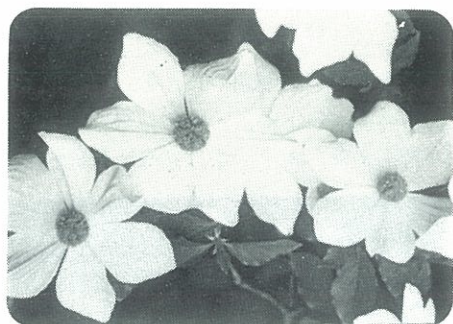
日本からは60～70名は出席していた。日本学術会議を通さず個人で出席を申込んだ人がいたので正確な出席人数はつかめなかった。私は専門分野上、植物生態学、植物地理学、生態系関係の開場に出席した。私の研究は「太平洋領域の生物相の起源、という主題の下に行なわれたシンポジウムで、「フィリピン諸島の植生と植物相の起源について」というテーマで発表した。

フィリピン諸島は新ワラス線、新ウエバー線には含まれたワラセア区域の一部で第三紀のスンダランド要素が優勢であり、パプアランド要素が劣勢に混在し、地質時代以来地殻変動のはげしかったところであるため、スペシエーションの豊富な地域である。その植物相と植生の起源についてはきわめて興味ある地域である。私は戦前ミンダナオ島のアボ山(2965m)、戦後ルソン島のマキ

* 九州大学名誉教授、理学博士
本協会理事

リン山で探究した資料に基づき論述した。

1975年には7月下旬レニングラードで国際植物学会があって日本から大勢の植物学者が出席したので、バンクーバーの太平洋学術会議には日本からは植物学者が数名出席したにすぎなかった。8月30日の閉会式で一応シンポジウムは閉会となったが引きつづいて8月31日から9月4日までバスツアーがあり、カナダ・インディアンに住むクサン地区へのツアーに、この大会に同行した妻と娘一人を伴って参加した。目的はカナダ・インディアンの民族学的見学であったが、到る処で自然植生としてのベチュラと針葉樹を主体とする森林植生をまのあたりに見ることが出来た。



第1図 カナダ国、ブリティッシュコロンビア州の州花ヤマボウシの一種、ドッグウッドの花

東京空港を8月17日午後7時すぎに出発して9時間余り飛行機にのっていたがバンクーバーに付いたのが時刻をさか上って同じ日の8月17日の午前11時半であった。これは日付変更線を通るのでそういうことになるのである。空港についた第一印象は8月下旬の夏のおわりに近いとはいえ、北国のカナダは肌寒い感じである。北米大陸の広い



第2図 一歩郊外に出ると針葉樹と樹はだが白いシラカバに似たベチュラの原生林が広がっている

国と言われているカナダは本当に広大で、針葉樹と樹幹が白色のベチュラ（シラカバの類）の原生林でおおわれ、森林資源は豊かである。

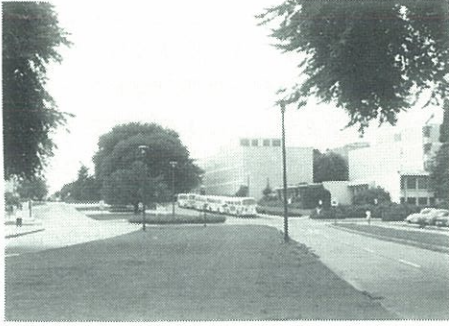
空港からバンクーバーのホテルまでタクシーで30分位かかった。妻と娘一人を同伴したのでセンチュリープラザホテル、アパートの19階で、大部屋と寝室と台所がついている部屋におちついた。立派な部屋で一日 CAN \$32,00 はやすい。このホテルは30階建だが、我々の泊ったホテルの他にも高い建物のホテルがかなり沢山あった。台所には水道のある流し、冷蔵庫、電気コンロと電気のオープンがついている。我々は2、3日してから町でパンや野菜、ハム等を買って来て朝は部屋で食べるようにした。果物店とケーキを売る店が大変少い。果物もリンゴ、いちご、ぶどう、バナナオレンジ等があるが、リンゴも小さいし、ぶどうもあまりいろいろな種類はおいてないようだった。夕食はホテルの一階の食堂でとったが大体1人4ドルたらず、1,200円位ですんだ。

8月18日午前10時からブリティッシュ・コロンビア大学の体育館で開会式があった。予め、開会



第3図 開会式で挨拶をする太平洋学術協会会長 Cowan博士

式に先立って、大会出席者の受付があり、妻と娘を同伴で開会式に参列した。国際会議で顔なじみの数名の外人植物学者に会ったが、欧米人参会者が大勢なので日本人は目立たなかった。この大学の構内は美しいので著名だが、私の見た感じでは構内全体が植物園か公園のようで、樹木が多く植えてあるが、やはり、如何にも北国という感じを樹木を見てピンと来た。そして、ヨーロッパ各地の大学に比べてキャンパスの広さがアメリカ合衆国におけると同様に一段と広いことが特徴であ



第4図 ブリティッシュ・コロンビア大学キャンパス内のバス発着所附近と研究棟の一部

る。広いのでキャンパス内案内専用のバスがあって、そのバスでキャンパス内の遠隔の地すみずみまで容易に行ける。また、ダウンタウンからくるバスの終点が、この大学のキャンパスの中央部にある。町のホテルから20～25分位で行ける。構内が広いのでバスが大学構内へ入ってからバス停が7つ位あってやっと終点につく。

バンクーバー市はカナダ第三位の大都市で人口約100万人であり、周辺の郊外を合せて風光明媚な点で著名である。カナダ最南西部に位置し、商業交通、教育の中心地。緑の多い美しい都市で、ブリティッシュ・コロンビア州の主都である。貿易港、漁港としても名高く、横浜と姉妹都市である。バンクーバーの都市名は18世紀のイギリス探険家キャプテン・バンクーバーにちなんでつけられたものである。工業の主なものはなく、この国の工業は主にこの国の東部及び中部に依存している。バンクーバー周辺を含んで、この地方一帯の自然環境が美しく保全され、大気汚染、水質が汚濁されていないのは、この国の中部や東部と異なっていて、この地方一帯に工業のみるべきものがなくむしろ商業・観光都市として栄えているためであろう。従って公害として被害をこうむっているものとみられるものはない。デパートや街頭の店舗に並べられている商品は主に英国本国の製品である。米国製品もいくらかあるが、日本、韓国、台湾の製品が可成り多く輸入され店さきに多く出まわっている。ウイスキー・ブランディーなどのアルコール飲料は所謂俗称カナディアンでこの国特有のものほかスコットランドから輸入されたスコッチがあるが、それらアルコール飲料の販売は政府が厳に制限し、これほどの大都会であるにか

かわらず、只8軒しか販売店がなく、朝早くから夜おそくまで客足がたえない。この8軒の店以外ではその販売が禁止されている。只ビールだけは夏季に夕方レストランの店先きのテラスでテーブルを囲んで可成り大勢が飲んでいるのをみかけた。

週休2日制で官公庁の勤務日は月～金の5日間ではあるが、町の商店は土曜日にも開いていた。学会は月～金で土・日には外来者は近郊へ思い思いにツアーに出かけた。

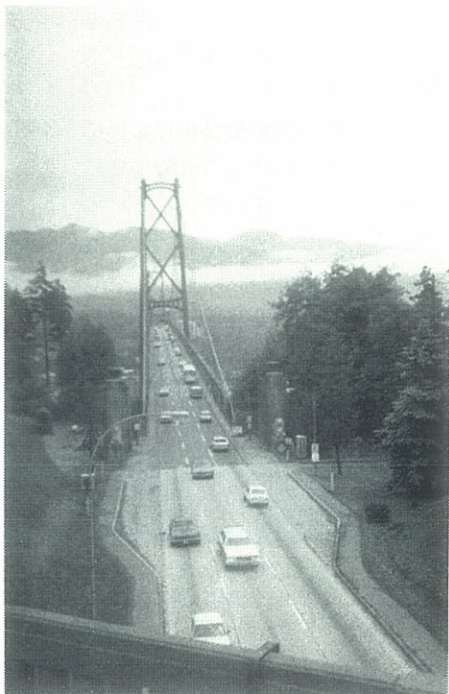
この期間中私は学会に出席するため毎日大学へ行ったが、妻と娘はウィークデイでも町なかや近郊の公園にショッピングや見物に出かけた。我々の泊っているホテルから歩いて20分位の所にスタンレーパーク (Stanley park) という公園がある。そこは広い公園で湖やこんもりと茂った森があり、テニスコートや、インディアンのトーテムポール等もある。木立のまばらな所にはリスがい



第5図 人なっこいスタンレー公園の野生のリス

て、我々の手からクルミやピーナツをもらってもって行く。土にうめておいてあとから掘り出してたべるのだろうか。水鳥や鳩も餌をもらいに人の所に集まって来る。欧米の国々で見えるように、この国でもいじめる人がいないので、こんなにも動物がなつくものかとつくづく羨ましく思った。

スタンレーパークの北側から、ノースバンクーバーにぬける所にライオンズゲートブリッジがある。これはカナダ第一の壮大なつり橋ということだ。町のなかでは、私達のホテルから道路に出てまっすぐ行くと、歩いて15分位でホテルバンクーバーがある。一般に高いビルやホテルはたいてい四角い型の建物だが、ホテルバンクーバーは屋根が梯型で、そのうえ、色がうす青いので遠くから



第6図 ライオンズゲートブリッジ，向う側はノースバンクーバー



第7図 ホテルバンクーバー

でもすぐわかる。そのホテルの先には港があって水上飛行艇がとび立ったり着水したりしていた。

我々が出歩いた日も雨が降ったりやんだりしていたが、その後もくもった日や雨の日が多く、8月とはいえ寒い日がかかりあった。13℃という日もあって、寒くてふるえる程であった。その中を、かもめが鳴きながらとんでいてなかなか風情がある景色だった。

バスでの市内観光地の一つにガスタウンという処がある。ここは昔ガス灯がついていたのでその名がついたとか。またチャイナタウンは今でも中国人が多く住んでいて中華料理店も沢山あった。

バンクーバーの街路は碁盤目状に道がついていて、その角には何々通と名前のついた札がかけられているので大変わかりやすい。それに比べると日本の町、福岡などは外人にはわかりにくいだろうとしみじみ思った。

ガスタウン、チャイナタウンから南へ行くと、クイーンエリザベスパーク (Queen Elizabeth park) がある。スタンレーパークの5分の1位の広さだが、いろいろな草花の花壇があって、花が咲いていて大変きれいな公園だ。この花にみちたフラワーガーデンで結婚式をしているのが遠くから見えた。



第8図 クイーンエリザベスパークのフラワーガーデンで結婚式をしていた

ある日バスで郊外の観光地カピラノパーク (Capilano park) に行った。ライオンズゲートブリッジ (Lions gate bridge) を渡って行ったがインディアンの等身大の人形が数体おいてあって俗っぽい公園だった。峡谷そのものはすばらしくつり橋は長く壮大だが、とにかく観光客が多くてガッカリした。バンクーバーから日帰りバスツアーで行けるヘルズゲイトと云う峡谷にも行ってみた。鮭がここまで上って来ると云う事だったが、雨が降って川の水がにごって鮭は見えなかった。



第9図 ヘルスゲート附近、
鮭がここまで川を上ってくるそうだ

季節の関係で鮭が昇ってこなかったのかもしれない。

とにかくバンクーバーはバス代が1回のとクオターコイン(約75円)を集金箱に入れなければならないが、それでのりかえが1回でも2回でも出来る。又ハムや野菜の値段は日本と大差はないようであったけれども、アイスクリームはずい分安くて、レディボーデンの大箱と小箱の中間位の大きさに220円位だった。

クサン地区へのポストコンGRESバスツアー。8月30日第13回太平洋学術会議の閉会式で大会は一応閉会したが、8月31日から9月4日まで我々一家はポストコンGRESバスツアーに参加した。

8月31日の朝6時にホテルバンクーバーの前をバスで出発し、ライオンズゲートブリッジを渡って7時にバンクーバーの港(ホースシューベイ)からフェリーにのり朝食を船内で食べる。セルフサービスで自分の好きなのをとって終りに会計の所で金を払う。なかなかいいやり方だと思った。9時に対岸のバンクーバーアイランドの港ナナイモについて船を下りる。バスに乗りかえてバンクーバーアイランドを一路北上する。12時半に終点のケルセイベイの船着場についたが、その間は郊外は人も車も少なくて、1時間当りすれ違う車は15台位のものだった。終点でバスを下りて船にのりこむ。直ぐ船内で中食をとったが、食事の終るころに船は出発。この船内に一夜泊るわけでキャビンの船旅は久しぶりである。娘はブリティッシュ・コロンビア大学の大学院女子学生と同室のキャビンにいった。夕方7時に夕食に行ったが、8時半頃でないとい日暮れないので外はまだ明るく食堂の窓の外をかもめが近々と飛んでいて可愛い

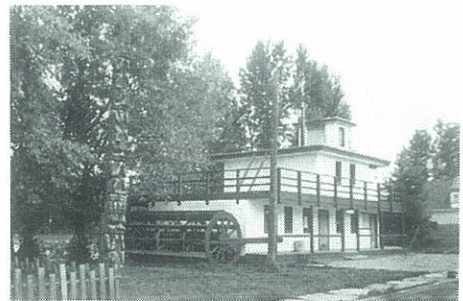
らしい。食事がすんでからデッキに出て見たが、夕ぐれの空にかもめが沢山とんでいて見事だった。10時頃床に入った。

9月1日、朝食がすんで9時すぎに上陸地点プリンスルパートに着いた。雨降りで大分寒い。金盞花や矢車草などが咲いている。日本の春、いや



第10図 プリンスルパートの個人経営の博物館。
内にはインディアン関係品の展示があり、みやげものも売っている。外壁の絵はインディアンのカニの絵

秋の気候と言うべきだろうか。途中博物館によったり、昼食の為にテラスという町のホテルによったりしたので、宿泊地のホテルインランダーについてのは午後5時頃だった。我々は学会関係の人30人余りの団体が旅行しているが、フランス人、ドイツ人、アメリカ人、カナダ人、日本人などで日本人は我々一家3人の他に秋田大学医学部の若い教授の合計4人だけである。皆好気心旺盛な人ばかりなので面白い旅行だと思ふ。娘はブリティッシュ・コロンビア大学の大学院女子学生キャロルという娘と2人で2階の一室をもらい、我々は一階の角の一室をもらった。通りの向うにはトートムポールがあって、そばに船の形をした博物館



第11図 クサンのホテルインランダーの近くにあるトートムポールと船の形をした小さな博物館

があった。その先は川になっていて、かなり幅の広い流れが悠々と流れている。夕食がすんで、ホテル近くのまわりを散歩した後、ホテルの広間に集まって明日からの見物の案内やカナダインディ



第12図 インディアンのとーテムポール、何とも奇妙な形をしている



アの社会生活について、この旅行団の案内役ローゼンタール教授からの説明や色々な意見の交換が討論会の様な形式で行なわれた。すんでから寝床に入ったのは11時近かった。

9月2日、朝食後バスによってキスピオクスという所へ行き、とーテムポールが10本位たっているのを見物する。このインディアンの人達は我々日本人と大変よく似た顔だちをしているが、とーテムポールは何とも奇妙な形のもので、我々と違った文化をもつ人達だとしみじみ思った。9月3日にはキツェグクラという所へ行って見た。

どこに行ってもとーテムポールは何とも奇妙な形をしている。熊の毛皮が家の外にかざってあったりして、気味のわるい所もあった。ホテルへもどって少し休んだ後、近くのクサンブレッジへ行く。バスではほんのちょっと行った所にある。今日はよく晴れていてよい気持での観光だ。クサンブレッジには木の板壁に模様のように絵が書いてある家が4、5軒建っていて観光客に見せるようになっている。



第13図 クサンブレッジにある観光客への即売品のある小屋。木の外壁に奇妙な絵がかいてある。

屋内は木彫や絵画、織物、小さい袋物、その他小物などがかざってあり、みやげものとして即売している。色々な面が壁にかけてあり、その内の一つに日本の「ひょっここ」の面そっくりのものがあつた。カナダインディアン の招待で我々旅行団一行はその中の一軒で夕飯をたべ演芸会を見せてもらった。食事は塩気がうすくてあまりおいしいものではなかつた。歌や踊りを見せてくれたが踊りにはそれぞれ意味があつて、一つづつ説明してくれた。全部終つてホテルに帰つたのは10時近かつた。

9月4日、いよいよバンクーバーに帰る日だ。バスでクサンをたって途中シムサースという所の大きなスーパーマーケットの食堂で中食をすませエアポートへ向う。シムサースから10分位で空港についた。小雨が降っている。午後2時すぎ空港発、ジェット機で約1時間かかってバンクーバーへついた。機上から見た山々は万年雪でおおわれた山頂が白く、さすが北国のカナダだなと、今更

ながら旅行先の北国を確認した。

9月5日、いよいよ今日は帰国。バンクーバー空港を午後2時すぎに出発する。行きと同じカナダ航空の飛行機にのりこむ。今日はよく晴れていて山に雪の残っているのが遠くからよく見えた。雪の残っている山は大体海拔2,500米以上の高山だそうだ。機上8時間余りかかって東京空港には日本時間の6日午後3時すぎに着いた。



